

В. В. コージノフ
『19世紀ロシア抒情詩論(スタイルとジャンルの発展)』
翻訳の試み

Опыт перевода книги В.В.Кожина
«Книга о русской лирической поэзии 19 века
(Развитие стиля и жанра)» (М., «Современник»,
1978) на японский язык

鈴木 淳 一
СУДЗУКИ Дзюнъити

これは、1978年にモスクワの出版社「同時代人」から出版されたワヂーム・ワレリアーノヴィチ・コージノフの『19世紀ロシア抒情詩論(スタイルとジャンルの発展)』を全訳する試みです。本書の章立ては以下の通りで、事情が許す限り、半年に1回、1回に1章ずつ掲載したいと思っています。

序

- 1章 「抒情詩の本質について数言」
- 2章 「ロシア抒情詩の起源と発展段階」
- 3章 「プッシュキンの詩の時代」
- 4章 「プッシュキン以後。チュッチェフとチュッチェフ派」
- 5章 「19世紀中葉の抒情詩。フェートとネクラーフ」
- 6章 「『沈滞期』(世紀末)の抒情詩」
- 7章 「結語に代えて」

ロシア詩の関する翻訳は、エフィム・エトキント『詩のはなし』（札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」 Vol.22, No.1; Vol.23, No.1; Vol.24, No.1; Vol.25, No.2; Vol.27, No.1）、B. B. コージノフ『詩作品はどう書かれるか——詩的創造の諸法則について』（Vol.30, No.1; Vol.30, No.2; Vol.32, No.1; Vol.32, No.2）に続いて3作目になります。Л. Я. ギーンズブルクの『抒情詩について О лирике』とどちらにしようかと迷ったのですが、前回からの惰性に押されて、また19世紀ロシア詩の隆盛、衰退、隆盛というプロセス、それにリアリズム全盛時代の詩と散文の関係により興味を引かれていることも手伝って、コージノフの書を選択することにしました。ギーンズブルクにも、いずれ機会があれば、挑戦するつもりでいます。

著者コージノフ(1930～2003年)の紹介については、訳者の知識不足もあってここでは割愛し、2004年に出版された文献目録にお任せしたいと思います(«Вадим Валерианович Кожинов. Библиографический указатель. Труды 1952-2002 гг.» Москва, ИМЛИ РАН, 2004)。

翻訳が困難と言われる詩を巡る論述の翻訳であるため、必要に応じて日本語にロシア語を並列した箇所も多々あります。読み辛いとは思いますが、訳者の力量不足をご海容くださると同時に、訳者自身とロシア詩に興味を持たれる方々のロシア詩理解がより正確に深まるための措置という弁解もお聞き届けくだされば幸甚です。

上付き数字は原注を表し、原注は脚注として訳しました。また訳注は[]に入れて本文中に埋め込むか、あるいは上付き数字前に「注」をつけて表し、章末にまとめることにしました。

原文の括弧、ゴチック、イタリックは、それぞれ括弧、ゴチック、傍点にしています。

序

Введение

開口一番、読者に断っておかなければならないのは、本書は19世紀ロシア抒情詩の歴史を扱ったものではないということである。本書が研究対象とするのは、まずはスタイルとジャンルの発展であって、内容と形式の全般にわたる抒情詩の発展ではない。換言すれば、本書では19世紀ロシア抒情詩という豊かな宝庫——文字通り無辺に豊かな宝庫——をすべて取り扱うつもりなど毛頭ない。抒情詩の群を抜いた大傑作、あるいはせめて抒情詩の真に意義深い作品だけにしても、そのすべてに多少とも具体的な評価を下そうとすれば、数巻におよぶ書物を書かなければならないであろう。

本書の狙いは、19世紀ロシア抒情詩について「すべて」を語るのではなく、未だ審らかにされていないいくつかの側面、いくつかの問題、いくつかの名前に照明を当てることである。それゆえ本書では、ある一つの現象に大きな関心が、ときには大き過ぎるくらいの関心が割かれているかと思えば、その他の現象には、広く人口に膾炙している現象も含め、ほとんど言及されることがない。

本書において目論まれているのは、したがって、プーシキン時代の抒情詩や19世紀中葉の抒情詩——より正確には第三四半世紀の抒情詩——をもう一度再考する試み、そしてほとんど研究されていない現象、すなわち「チュッチェフ」派(1830年代～1850年代)と19世紀末(最終四半世紀)の抒情詩を評定する試みである。

その一方、本書では、たとえばレールモントフやコリツォーフといった大詩人への言及がほとんどなされていない。実際のところ、ジュコーフスキー、パーチュシコフ、デニス・ダヴィードフ、カテーニン、グリボエドフといったプーシキンの先行者や年上の同時代人の抒情詩、それに多少ともレールモントフに近しかったポレジャーエフ、オガリョーフ、カロリーナ・パーヴロフ、また多少ともコリツォーフに近かったニキーチン、スーリコフ、トレーフ

ォレフといった詩人の抒情詩は、本書の埒外に置かれている。

しかし本書は、繰り返し言うておくが、抒情詩の歴史を扱うものではない。本書を構成しているのは、ある特定の時代の抒情詩のスタイルとジャンルの発展の考察に割り振られた諸章である。

さらに言うておかなければならないのは、本書の前提の多くが、どんな新しい問題解決法もほとんどがそうであるように、論争的な性格を持っているということである。たとえば、プッシュキンとその盟友たちの抒情詩にはルネサンス的特質 *ренессанская природа* があるという主張には、文学研究者の誰もが賛同しているわけではないし、ロシア抒情詩の中に「チュッチェフ」派というグループを分別することにはまったく反対がないわけではないし、フェートの抒情詩を巡っては依然として論争が続いているし、19世紀末の抒情詩に対する相対的に高い評価も大いに論駁される可能性がある等々、といった塩梅である。

しかし、文学研究はいつでも論争と議論の明け暮れの中で発展してきたし、発展し続けている。当然なことながら、本書がロシア文学の貴重な一部である19世紀抒情詩の研究に、たとえ慎ましくとも、それなりの貢献をもたらしてくれることを願わないではいられない。

この機会を利用して、本書の原稿を通読する労を厭われなかったソ連科学アカデミー準会員Л. И. Чмофеев氏、「文学の諸問題」誌副編集長Е. И. Осетров氏、哲学博士にしてプッシュキン研究所上級研究員А. И. Павловスキー氏に感謝の意を表したい。

1 章

抒情詩の本質について数言

Несколько слов о природе лирической поэзии

抒情詩は、ロシア文化を具現したもっとも価値あるものの一つである。ロシア抒情詩人たちの大傑作群は、世界の抒情詩全体によって作り上げられた作品すべての最上級に属している。

抒情詩はもちろん、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフあるいはショロホフの物語に固有の歴然たる権威を世界に対して持っているわけではないが、抒情詩がその母語と、そして母語に備わる唯一無二の音響 *звучание*、および構造 *строение* と緊密極まりない紐帯で結ばれている以上、それは仕方のないことである。抒情詩作品の翻訳は、筆者の確信するところによれば、元来の芸術的価値を失った、たんなる原作の意味の説明 *изложение* のようなものとなるか、あるいは異国民の傑出した詩人によって同一テーマで創作された、原作とは異なった作品——たとえ出来栄は素晴らしくとも、いずれにしても本質的に異なった作品——となるしかない(たとえば、レールモントフの『連なる山の頂が… Горные вершины…』は、ゲーテのテーマで創作されたロシア詩の大傑作である)¹⁾。抒情詩がその素材たる言語の埒外において叙事的散文と競い合うことなどできないのは、まさしくこのために他ならない。

抒情詩は言語芸術の極めて独自の形式であり、叙事詩とはもちろん、ましてや散文とは根本的に異なっているのである。抒情詩と叙事的物語とは、本質的に別々の芸術なのだ。抒情詩も叙事的物語も同じ素材から、すなわち言語から作られるという事実にしても、双方の同質性など微塵も意味してはいないのである。

たとえば、同一素材から作られるものとして、建築作品と彫刻作品(石や木、金属、等々)、装飾品と絵画作品(平面上の線と色)、ダンスと総合舞台芸術の基礎としての演劇パントマイム(人間の肉体運動)などがあるが、これらのそれぞれが我々の目に根本的に異なる芸術種として映っていることは明らかである。建築や装飾、ダンスは、その独自の芸術形式において一定の世界観、気分、経験を具象化しようとする表現芸術 *выразительное искусство* であり、一方彫刻や絵画、演劇パントマイムは、その形式において現実そのもののリアルな形式をどうにかして再現しようとする描写芸術 *изобразительное искусство* なのである¹⁾。

¹⁾ このことについては拙著 «Виды искусства(芸術の種類)» (M., «Искусство», 1960)で詳細に論じられている。

同じことは抒情詩と叙事詩、物語との関係にも言える。抒情詩作品は、短編や中編、長篇、物語詩などとは違って、描写ではなく表現に、何らかの経験の表現、もっと広く言えば何らかの世界観の表現に立脚しているのである。抒情詩にもまたもちろん、人間や出来事、風景等々の諸特徴を再現しようとする描写的要素がないわけではない。しかしそうした描写的要素は、必ずしも必要なものではない。古典的な抒情詩作品には描写的要素のまったくない作品が少なくない（いくつか例を挙げるなら、プッシュキンの『私はあなたを愛していた。あの愛はきっと今もまだ… Я вас любил: любовь еще, быть может…』、レールモントフの『退屈にして物悲しく、(胸塞ぐときに)手を差し伸べてくれる人としていない… И скучно, и грустно, и некому руку подать…』、チュッチェフの『シレンチウム! Silentium!』、ネクラソフの『俺はもうすぐ死ぬだろう。僅かばかりの遺産は… Умру я скоро. Жалкое наследство…』、ブロークの『嗚呼、私は狂気を生きたい… О, я хочу безумно жить…』、ザボロツキーの『心に怠惰を許してはならない… Не позволяй душе лениться…』などである)²²。

描写的要素が必ずしも必要ないという事実は、表現性という抒情詩固有の本性を如実に指し示している。

もちろん、程度の差こそあれ多量に描写的デテールを含んだ抒情詩作品も、たくさんあるにはある。しかしながら、そうしたデテールが抒情詩の内的基盤を構成することはない。それはちょうど、多くの建築作品にデテールとして登場する人間や動物の描写が、それら建築作品の本質を規定してはいないのと同様であり、またダンスにしばしばつきものの労働行為や戦闘行為、あるいは日常的な活動や仕草の再現が、ダンスという芸術において決定的な役割を果たしてはいないのと同断である（もっとも、そうした再現がある種のダンスに一定の彩りを与えていることは疑いようもない）。

以上のような比較をここで持ち出したのは、言語芸術においては描写性と表現性の根本的相違が、他の芸術種の場合におけるほどはっきりとは現れないからに他ならない。同じ素材（たとえば大理石）から作られた円柱と彫像が、あるいは同じアーティストによって演じられるダンスと舞台の1幕とが、それぞ

れ異な^らった芸術種に属していることは、誰の目にも明らかである。だが芸術言語の領域では、同様の相違自体がそれほど一目瞭然というわけではない。なぜなら、石でできた対象物を、あるいはアーティストの運動を見分け、そこに何の苦もなく描写的形式と表現的形式の違いを識別するように、言葉を「見分けること」などできない相談だからである。

言葉はもちろん、それが読まれたものであれ聞かれたものであれ、その物質性において知覚されるが、言語芸術作品の実際的な知覚が言葉の意味の知覚なしに——直接的な外的感覚によってではなく、内的認識によって理解される言葉の意味の知覚なしに——行なわれるとは到底考えられない。芸術言語の全体を視覚や聴覚、触覚によって察知することなど不可能なのだ。

したがって言語芸術の描写的形式と表現的形式を区別するためには、認識の本質的な努力と深化が不可欠である。建築と彫刻の根本的相違は単純に看取することができるのだとすれば、勝るとも劣らず本質的な抒情詩と叙事詩の相違はただ理解することができるだけなのである。

抒情詩作品と物語の芸術的本質について考えを巡らせれば、次のような結論に達するだろう。物語が——それがゴーゴリの『外套』であれ、トルストイの『コサック』であれ、ショーロホフの『静かなドン』であれ——物語が読者に提示するのは、あたかも作者自身とさえも無縁であるかのような「客観的な」芸術的現実である。読者の想像力を前に繰り広げられるのは、ある実生活上の出来事(あるいは一連の出来事)、すなわち具体的な時空で生起する人間同士の相互関係である。

一般的に言って、読者が直接知覚するのは、この実生活上の出来事の現実性ではなく、芸術的な言葉、すなわち物語作者によって作り出された、複雑だが首尾一貫した言語イメージである。しかし、叙事的作品を実際に知覚しようとするれば、多少なりとも言語のことは「忘れて」、その言語によって具象化された出来事の現実性に沈潜しなければならない。

抒情詩作品を知覚する場合は事情がまったく異なる。抒情詩作品に具現化されているのは出来事の現実性ではなく、経験の現実性だからである。経験——

それはいわば精神生活の出来事、心的活動の出来事である。日常的な言葉遣いにおける「経験」はしばしば、ごく限られた個人的で内輪的な何かを意味する。だが、抒情詩に適用される場合の「経験」は、ある近い人や全国民との付き合いからでも、愛や革命との関連からでも、春の一日や宇宙全体との関係からでも生じうる、あらゆる精神運動のことなのである。しかも詩人は、自分の経験すべての一つ一つに、私人として市民として、色や音、匂い、生の量感をじかに感じ取る生物として、抽象的な思考を繰り広げる哲学者として、どうかしてその存在を刻印せずにはいないのである。

問題の核心は、抒情詩の「対象」とは経験であるということ、その経験は、たとえ現実のどんな出来事、あるいは現象によって招来されたにせよ、いつでも人間精神の躍動的にして深く個人的な活動以外の何物でもないということである。だから、たとえ抒情詩作品の中に何らかの客観的な出来事が登場するとしても、その出来事は経験のいわば素材のような役割を果たしているに過ぎないのである。

抒情詩と叙事詩の間に境界線を引こうとしても、芸術におけるあらゆる境界線と同様、そこに数学的正確さを期すことなどではできない。経験と出来事が多少とも同等の権利を主張する抒情的叙事作品 *лироэпическое произведение* というものの多様な領域も存在するからである。それでも、ロシア詩はもちろん世界詩においても大きな比重を占めているのは、いわば純粹抒情詩——描写的要素が自立的な意味を持たず、出来事（それに人間の相貌、風景、何らかの現象や対象）がたんなる経験の契機か素材に過ぎない純粹抒情詩——なのである。

経験とは人間の認識に関わる現象なのであって、それはただ表現することができるだけであり、文字通りの意味での描写はできない。抒情詩は本来的に表現芸術なのである。このことをとくに如実に示すのは、読まれてしまった抒情詩作品というものは、読者がほんの数行でも暗記していなければ、ときにはたったの1行——たとえば作品全体の躍動的リズム構造を多少とも体现している最初の1行——でも暗記していなければ、ほとんどまったく存在しないも同然だという事実であろう。

物語の場合は事情がまったく異なる。読者は、ただの1語すら記憶できなくとも、言葉によって再現された出来事の芸術的現実性をはっきりと思い浮かべることができる。それに対して抒情詩作品によって再現される経験は読者にとって、所与の具体的でリズムカルな言葉という肉体の中にしか存在しないのである。この肉体を欠いてしまえば、経験はさながら詩人自身にとっても存在しないも同然とさえ言い切ってもよいが、それは、言葉を欠いた経験とは無意識的で曖昧模糊とした心理的過程の一刹那に過ぎないからである。自分自身の経験を認識し、鮮明に思い浮かべるためには、どうしてもその経験を「分節化し」、認識の対象へと変換してやらなければならない。そしてそうするためにはまず、その経験に言葉を「着せて」やらなければならないのである。

換言すれば、抒情詩の内容は、叙事詩の場合と比べると、リズムカルな音的素材も含め、言葉のすべてと緊密な関係にあるということ——それこそ切っても切れない表裏一体の関係にあるということである。まさしくそれゆえにこそ、またしても物語と比べた場合の話であるが、抒情詩を他の言語素材で再現することは極めて困難なのである(抒情詩はそもそも翻訳不可能とするもっともな意見すらある)。

だが抒情詩は、世界に対する影響力の広範さにおいては物語に劣るにしても、私見によれば、その抒情詩を有する国民の精神生活への浸透度という点においては物語を凌駕しているのである。抒情詩は、人間がそれをそのまままるごと自分の中へ「取り込み」、作品全体もしくはその断片なりとも、自らの認識の不可分な一部へと変容させてしまうことのできる、唯一の芸術種なのである。他の芸術種の作品は、人々の心の中に印象として、そうした作品と出会ったことの思い出として生きるのに対し、抒情詩作品はそれ自体があらゆる人それぞれの心の中に根を下し、成長するのである。

ここで大事なのは、あれやこれやの抒情詩作品を何百万もの人々が、声に出してであろうと、心の中でひっそりとであろうと、暗誦しているということだけなのではまったくない。

抒情詩作品をものにしようとするとき、読者は実際に自分を詩人の個性に重

ね合わせ、自らをその作品の作者だと感じる。厳密に言えば、こうした創造的な境位というものは、芸術作品全般を真に深々と知覚するとき固有のものである。だが、抒情詩作品を知覚するとなると、ましてや朗読によって知覚するとなると、もはや読む「私」が詩人の「私」と直結融合してしまうのである。そうであればこそ抒情詩については、それを人間の心にもっとも深く染み渡る芸術として語ることになるのである。

プッシュキンの『嵐が濃霧で空を覆い隠し… Буря мглою небо кроет…』、レー尔蒙トフの『私は一人、旅に出る… Выхожу один я на дорогу…』、チュッチェフの『五月初めの雷雨が好きだ… Люблю грозу в начале мая…』、ネクラソフの『背高な穀物林の中に埋もれてしまっている… Меж высоких хлебов затерялся…』、フェートの『僕が来たのは君に挨拶するため… Я пришел к тебе с приветом…』、エセーニンの『まだ達者かい、俺の婆ちゃん… Ты ещё жива, моя старушка…』等々——これらの作品はすべて、個人と国民全体の精神生活に欠かせない有機的要素となっている¹³。

さらに付け加えておかなければならないのは、ロシア抒情詩の巨匠たちの非常に多くの作品が曲をつけられ、国民歌謡に、あるいは真に国民的なロマンスになっているということである（ロマンスは歌謡と違って、通常はソロを、特別な場合はデュエットを前提としている。またロマンスのメロディーは歌謡のメロディーよりも、詩作品のテキストに、詩作品のイメージやリズム、イントネーションの独自性により密接に結びつけられている）。こうした事情に促がされて抒情詩作品はますます広く、深く国民の心の中へ染み込んでゆくことになった。おそらく、このような傑作抒情詩の全国的な摂取吸収という現象は、ヨーロッパのいかなる文化にも見られない、ロシア独特のものだと思われる²。現在、真の国民性を獲得している、もっとも深遠にして繊細優美な抒情詩作品をテキストとして作られたロマンスとは言えば、それはたとえばプッシュキンの

² 最近私には、歌謡やロマンスが非常に人気のあるイタリアのラジオ、テレビの関係者と懇談する機会があった。しかし、彼らが伝えてくれたところによると、イタリアには大詩人の作品を歌詞とした流行ロマンスはまったく存在しないとのことであった。

『遙かなる祖国の岸辺を求めて… Для берегов отчизны дальней…』、チュッチェフの『あなたに出会った——すると過去のすべてが… Я встретил вас – и все былое…』、フェートの『君には何も言うまい… Я тебе ничего не скажу…』等々といった作品であろう²⁴。

上記のように言う場合、重心は音楽にあるのでは決してない。トルストイは『戦争と平和』の中で次のように言っているが、正鶴を見事に射抜いている²⁵——ロシア国民は歌を歌うとき、「歌謡の意味のすべてはただ歌詞にこそあるのだということ、メロディーは自然とやってくるのだということ、独立したメロディーなどありえず、メロディーはただたんに歌詞の調子を整えるためにあるだけなのだということ、心の底から素朴に信じ切っている с тем полным и наивным убеждением, что в песне все значение заключается только в словах, что напев сам собой приходит и что отдельного напева не бывает, а что напев – так только, для складу」³。

ロシアの大詩人の詩作品を歌詞としたロマンスのメロディーはただひたすらに、その詩作品の芸術的構造を、さらには意味をもくっきりと浮き彫りにし、誰にでも分かり易くしてくれるもののように思われる。だから我が国でとりわけ高く評価されるのは、詩作品の意味こそ第一とする演奏者であって、メロディーの名人芸的な演奏者ではないのである(たとえばイタリアでは、事情が我が国とはまったく逆である)。

敢えて言っておきたいのは、抒情詩とは一種の内面的心髄だということ、つまりそれは、同義反復的表現を恐れずに言えば、ロシア人一人一人の心中に息づくロシア文化の精髓そのものに他ならないということである。我々ロシア人がいつでもこのことに気づいているとは限らない。なぜなら、どんな時でも自身の内なるものに気づくのは容易な技ではないからである。

* * * * *

³ Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 14-ти томах, т.5. М., Гослитиздат, 1951, с.271.

ここまで主として話題にしてきたのは、抒情詩の^死^命を^制^する^基^盤についてであった。しかし、忘れてならないのは（残念なことには、非常にしばしば忘れられがちなのだが）、抒情詩とは芸術 *искусство* であるということ、しかも極めて複雑にして手の込んだ、繊細優美な芸術であるということである（抒情詩作品の場合にはとりわけ、その微細この上ないデテールに、たとえそれが抒情詩作品に特有のぎりぎりに切り詰められた短さ、簡潔さゆえの宿命だとしても、実に巨大な意味的負荷が背負わされるのである）。

多くの人々はあれこれの抒情詩作品を一種の日記風メモ、つまり作者の自分自身との対話とみなしたり、あるいは特定の人に宛てられた「手紙」、つまり書信とみなしたり、あるいは雄弁術風の公共的発言とみなしたり、あるいは作者の思想の「編成」とみなしたり、あるいはたんなる風景描写などとみなしたりしがちである。抒情詩に対するこうしたアプローチは、ある程度の^根^拠を持っている。というのも、そこで問題とされるのは、あれこれの^人^間^的^経^験に関する^表^現の多種多様なタイプや形式についてだからである。抒情詩はどうしても日常生活の諸形式に依存せざるをえないので、たとえばそれを^瞑^{想的}抒情詩 *медитативная лирика*（*медитация*は *раздумье* の意のラテン語）、書簡体抒情詩 *эпистолярная лирика*（書簡詩 *стихи-послания*）、時評的抒情詩 *публицистическая лирика*、あるいは市民的抒情詩 *гражданская лирика*（全同国人、あるいは全人類に呼びかける抒情詩）等々といった風に腑分けし、差別化することもできるのである。その一方で抒情詩はまた、^哲^学^的抒情詩 *философская лирика*、^歴^史^的抒情詩 *историческая лирика*（過去の出来事に関する思索に基づいた抒情詩のことで、たとえばA.K.トルストイに多く見受けられる）、^政^治^的抒情詩 *политическая лирика*、「^内^輪^的抒情詩 *интимная лирика*」（その代表は恋愛抒情詩 *любовная лирика*）、^風^景抒情詩 *пейзажная лирика*、^日^常^生^活抒情詩 *бытовая лирика* 等々といった具合に、テーマに応じた区別も可能なのである。

しかし、こうした体系化が理に叶っているのはただ、そうした体系化の背後で抒情詩の^芸^術^的本質 *художественная сущность* が^忘^却されていない場合だけである。抒情詩作品を何らかの性格づけをされた^言^表 *высказывание* として

(凝縮された瞑想、アピール、誰かに宛てた「書信 *послание*」、同国人へ向けたスピーチ等々として)、何らかのテーマに捧げられた言表として受容することはできない。結局のところ、そうしたアプローチが有効なのは、芸術的に脆弱な、本来的な抒情芸術の水準に達していない作品に対してだけである。いわんやそうしたアプローチが、真の芸術性などそもそも求めようとしない、押韻した作者の「自己表出 *самовыражение*」でしかない作品に有効なことは論を待つまでもあるまい(こうした「プロラしからぬ」詩作品は、無数の人々が、とりわけ青春時代に書いている)。

真の抒情詩作品とは、完結的で自立的な芸術的現実が創出、確立されている詩作品 *стихотворение* のことである。経験それ自体は、抒情詩創作の対象、客体に過ぎないのであって、抒情詩創作固有の本質ではない。詩人はたんに自らの経験を吐露するのではなく、自らの経験から完結的で美に貫かれた作品世界を創出するのである。

本物の詩作品の場合、読者の眼前に姿を現すのは、経験ではなく、高邁にして豊饒な意味を内包した芸術的イメージ *художественная образ* である。そのイメージの創出には詩作品の全成分が参加している。作品を構成する言葉の音響そのものも(この音響は、読者が作品を「ひっそり *про себя*」読むとき、人それぞれに知覚される)、全リズム体系も、言葉の一つ一つも、言葉同士の複雑な結びつきも、狭義の「比喩 *образность*」(メタファー、形容辞、比較対照、等々)も、作中に描かれた事実や対象も、そして作中に具象化された思想も参加している。しかも、これらの成分すべてが有機的統一体をなし、相互連関的に作用し合っていることは言うまでもない。

いくら悲しんでも悲しみ切れないが、皮相的な考えが実に広く人口に膾炙している。その考えによれば、抒情詩人の課題は、すでに準備済みであるかのような内容(つまり経験)を、「美しい」形式に流し込むということに尽きてしまうらしい。しかしその一方、傑出したロシア抒情詩人の一人、ヤーコフ・ポロンスキーは、説得力に満ちた信念を込めて、事態の本質を次のように説明している——「抒情詩作品に飾りつけを施すということ、あるいは1行1行を整

形し、形式を可能な限り優美なものに仕立て上げるということは、いったいどういうことであろうか？ 信じてほしいのだが、これは自分自身の何らかの感情に飾りつけを施し、それを人間的天性で考えられる限り優美なものに仕立て上げるということに他ならない… 詩行 1 行に艱難苦吟すること——それは詩人にとって自分の魂に艱難苦吟することと同断である Что такое – отделять лирическое стихотворение или, поправляя стих за стихом, доводить форму до возможного для нее изящества? Это, поверьте, не что иное, как отделять и доводить до возможного в человеческой природе изящества свое собственное, то или другое, чувство... Трудиться над стихом – для поэта то же, что трудиться над душой своей⁴。しかし、自分の経験を「優美なものに仕立て上げることを доводить до изящества」——それは詩人にとって「詩行 1 行に艱難苦吟すること трудиться над стихом」と同じだという逆の主張もまた正しいであろう。というのも、詩人の作品は内容と形式の有機的統一体なのだから。詩人にとって、美しい内容を創出しようとすれば、美しい形式を創出する以外に取るべき道はないのである。

すでに上述したように、抒情詩における内容と形式とは（たとえば叙事詩と比べて）、絶対に切り離し難いものである。実際のところ、抒情詩の内容と形式を「ばらばらに по отдельности」検討することなど、どう転んでも無理である。抒情詩作品の内容だけを個別的に考察しようとすれば、芸術的意味を持たないその作品の対象、客体へと話題をずらさざるを得ず、また形式だけを切り離して分析しようとすれば、思わず知らずその形式を組成する言語と韻律の素材を粗上に上らせざるを得なくなるであろう。その場合、詩作品それ自体はあっさりと手を滑り抜け、蒸発し、読者の視界から消え去ってしまうだろう。抒情詩に関して言及できるとすれば、それはただ内容と形式の統一体 единствоについてだけなのである。

興味深くて意義深く、目も眩まんなばかりの「内容」を——より正確には対象

⁴ «Русское слово», 1859, №1, с.66.

を——備えてはいるものの、同時に真の価値を欠落させている作品は、山のようにある。まったく同様に、優美にして独創的な「形式」を——より正確には素材を——備えてはいるものの、愚にもつかない作品もまた山ほどある。一言で言えば、事の本質は内容にあるのでも形式にもあるのでもなく、内容と形式の統一体にこそあるということなのである。

しかし、こうしたことのすべては非常に複雑な大問題であって、この手短な序文で具体的に検討することなど到底不可能である。筆者はかつて抒情詩の本性について別な著書——『詩作品はどうやって書かれるか——詩的創造の諸法則について Как пишут стихи. О законах поэтического творчества』(M., «Просвещение», 1970) ——で論究したことがあるので、読者の皆さんにはそれを参照されることもお勧めしておこう²⁶。とはいいいながら、抒情詩の本性と関連した諸々の理論的な問題については、本書においてロシア抒情詩の現象をあれこれと検討するときにもまた言及することになるであろう。

訳注

01. 引用されている作品の全貌を次に紹介しておこう(大意把握の参考として日本語訳も付すこととする)。

① レールモントフ(Михаил Юрьевич Лермонтов. 1814-1841)

ИЗ ГЁТЕ

Горные вершины
Спят во тьме ночной.
Тихие долины
Полны свежей мглой.
Не пылит дорога,
Не дрожат листья...
Подожди немного,
Отдохнёшь и ты.
(1840)

ゲーテより

連なる山の頂が
夜の闇の中で眠っている。
密やかな谷間には
新鮮な霧が満ちている。
道には埃一つ漂わず、
葉はびくりともしない…
しばし待つがいい、待てば
お前の疲れも癒えるだろう。

これは、ゲーテのもっとも有名な、そしてシューベルトの歌曲としても知られる、『旅人の夜の歌 Wanderers Nachtlied』の二番目の作品『あらゆる嶺の上空に Über allen Gipfeln (Над всеми вершинами)』を自由訳したものである。ゲーテはこの作品を1780年、イルメナウ滞在中にキッケルハーンの山小屋の壁に書きつけ、1815年に発表している。

Über allen Gipfeln
Ist ruh,
In allen Wipfeln
Spürest du
Kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde.
Warte nur, balde
Ruhest du auch.

あらゆる嶺の上空に
安らぎがある。
どの梢の間にも
風の気配は
ほとんどしない。
森に鳥の囀りは聞えない。
ただ待つがいい、さればやがて
おまえも安らぐだろう。

02. 引用されている作品の全貌を次に紹介しておこう。

① プウシキン(Александр Сергеевич Пушкин. 1799-1837)

Я вас любил: любовь ещё, быть может,
В душе моей угасла не совсем,
Но пусть она вас больше не тревожит,
Я не хочу печалить вас ничем.

私はあなたを愛していた。あの愛はきっと今もまだ
私の心からすっかり消え去ってはいまい。だがあの愛に
もう二度とあなたの胸を騒がすようなことはさせまい。
あなたには何があっても悲しんでほしくないから。

Я вас любил безмолвно, безнадежно,
То робостью, то ревностью томим,
Я вас любил так искренно, так нежно,
Как дай вам Бог любимой быть другим.
(1829)

私はあなたを愛していた、密やかに、望みなく、
ときにおずおずと、ときに嫉妬に苦しみながら。
私はあなたを愛していた、かくも真剣に優しく、
あなたが他の人に愛されることすら切望するほどに。

② レールモントフ

И СКУЧНО И ГРУСТНО

И скучно, и грустно, и некому руку подать
В минуты душевной невзгоды...
Желанья!.. что пользы напрасно и вечно желать?..
А годы проходят – все лучшие годы!

Любить... но кого же?.. на время – не стоит труда,
А вечно любить невозможно.
В себя ли заглянешь? – там прошлого нет и следа:
И радость, и муки, и всё там ничтожно...

Что страсти? – ведь рано иль поздно их сладкий недуг
Исчезнет при слове рассудка;
И жизнь, как посмотришь с холодным вниманием вокруг, –
Такая пустая и глупая шутка...
(1840)

退屈にして物悲しく

退屈にして物悲しく、胸の塞ぐときに
手を差し伸べてくれる人とていない。
希望だって!... だが当てなくひたすら望んでどうなる?
歲月人を待たず——最良の歳月が過ぎてゆく。

恋する... だが誰を?... 泡沫の恋なら額に汗する甲斐もなく、
永久の恋もまたできはしない。
己が心を覗き込んだらどうか?... そこには過去の跡形もなく、
そこでは喜怒哀楽、すべてが取るに足らぬこと...

情熱など何になろう? その甘美な病も遅かれ早かれ
理性の言葉の前で消え失せてしまうのだとすれば。
人生とは、冷静な注意深い目で傍観すれば、
なんとも虚ろで馬鹿げた代物に過ぎない...

③ チュツチェフ(Фёдор Иванович Тютчев. 1803-1873)

SILENTIUM! (МОЛЧАНИЕ)

シレンチウム!(沈黙!)

Молчи, скрывайся и тай
И чувства и мечты свои –
Пускай в душевной глубине
Встают и заходят оне
Безмолвно, как звезды в ночи, –
Любуйся ими – и молчи.

黙すがいい、閉じ籠るがいい、そして隠すがいい、
己の感情の数々、夢の数々を——
感情と夢が心の奥底で
夜の星座さながら湧き上がり
押し寄せるがままにさせておけ——
その感情と夢を凝視し——そして黙すがいい。

Как сердцу высказать себя?
Другому как понять тебя?
Поймёт ли он, чем ты живёшь?
Мысль изреченная есть ложь.
Взрывая, возмутишь ключи, –
Питайся ими – и молчи.

どうして心に己を言い表すことができようか?
どうして他人にお前を理解できようか?
どうして他人にお前の生甲斐を理解できようか?
語られた思想は虚偽に過ぎない。
心の泉を掘り起こし、掻き混ぜるがいい——
その湧水を味わい——そして黙すがいい。

Лишь жить в себе самом умей –
Есть целый мир в душе твоей
Таинственно-волшебных дум;
Их оглушит наружный шум,
Дневные разгонят лучи, –
Внимай их пенью – и молчи!
(≒1830)

己が心だけで生きることを学ぶがいい——
お前の心には深く秘められた思想の
めくるめく一大世界が眠っているのだから。
それら思想の声を外部のざわめきは押し殺し、
昼の光は散逸させてしまおう——
それら思想の歌に耳を澄まし——そして黙すがいい!…

④ ネクラёв(Николай Алексеевич Некрасов. 1821-1878)

(Посвящается неизвестному другу
присловшему мне стихотворение
«Может быть»)

(詩作品『たぶん』を私に送ってくれた
見知らぬ友人に捧ぐ)

Умру я скоро. Жалкое наследство,
О родина! оставляю я тебе.
Под гнётом роковым провёл я детство
И молодость – в мучительной борьбе.
Недолгая нас буря укрепляет,
Хоть ею мы мгновенно смущены,
Но долгая – навеки поселяет
В душе привычки робкой тишины.
На мне года гнетущих впечатлений
Оставили неизгладимый след.

俺はもうすぐ死ぬだろう。僅かばかりの遺産は、
おお故郷よ! お前に残してゆこう。
生まれながらの重荷を背負って俺は幼少期を
青春時代を過ごした——辛い戦いの日々だった。
しばしの嵐は人を強く鍛え上げてくれる、
たとえ束の間は泡を食うことがあろうとも。
だが長い嵐となると——人の心の中に永遠に
びくつきながら安らぐ習慣を刻みつけてしまう。
重苦しい印象ばかりの歳月は俺に、
拭っても拭い切れない傷跡を残した。

Как мало знал свободных вдохновений,
О родина! печальный твой поэт!
Каких преград не встретил мимоходом
С своей угрюмой музой на пути?..
За каплю крови, общую с народом,
И малый труд в заслугу мне сочти!

Не торговал я лирой, но, бывало,
Когда грозил неумолимый рок,
У лиры звук неверный исторгала
Моя рука... Давно я одинокий,
Вначале шёл я с дружною семьею,
Но где они, друзья мои, теперь?
Один давно рассталися со мною,
Перед другими сам я запер дверь;
Те жребием постигнуты жестоким,
А те прешли уже земной предел...
За то, что я остался одиноким,
Что я ни в ком опоры не имел,
Что я, друзей теряя с каждым годом,
Встречал врагов всё больше на пути -
За каплю крови, общую с народом,
Прости меня, о родина! прости!..

Я призван был воспеть твои страданья,
Терпеньем изумляющий народ!
И бросить хоть единый луч сознанья
На путь, которым бог тебя ведёт,
Но, жизнь любя, к её минутным благам
Прикованный привычкой и средой,
Я к цели шёл колеблющимся шагом,
Я для неё не жертвовал собой,
И песнь моя бесследно пролетела,
И до народа не дошла она,
Одна любовь сказаться в ней успела
К тебе, моя родная сторона!
За то, что я, черствее с каждым годом,
Её умел в душе моей спасти,
За каплю крови, общую с народом,
Мои вины, о родина! прости!..
(1867)

自由な靈感をなんと少ししか知らないことか、
おお故郷よ、お前の生んだ哀れな詩人は！
陰鬱なミュージックを道連れに、これまで俺が
出くわさなかった障害などあるだろうか？…
みんなと同じ血の一滴に免じて
ちっぽけな作品も俺の手柄と認めてほしい！

俺は堅琴を生業としていたわけではないが、
それでも是非も言わせぬ運命に脅されて
俺の手が堅琴から覚束ない音を爪弾き出すことも
あるにはあった… 俺はもうずっと一人ぼっちだ。
初めは仲睦まじい家族と一緒に生きていた。
だがその家族も、わが友よ、今何処？
ずっと前に俺から去って行った奴もいた。
俺の方から家の外に締め出した奴もいた。
過酷な運命の虜になった奴もいれば、
とうにこの世におさらばした奴もいる…
一人ぼっちになったこと、
頼れる人の誰もいないこと、
年を経るごとに友人を失い、
道々敵を増やしてきたことに免じて、
みんなと同じ血の一滴に免じて、
俺を許してくれ、おお故郷よ！ 許してくれ！…

俺の使命とは、お前の苦悩を、
驚くほど辛抱強いみんなを歌い称えることだった！
そして神がお前を歩ませようとする道程に
自覚の光を一条たりとも投げかけることだった。
だが浮世の暮らしを愛し、毎日の泡沫の悦楽に
習慣と環境によって縛りつけられたこの俺は、
目的へと向かう歩調をふらつかせ、
目的のために我が身を捧げようともせず、
俺の歌もどこへともなく雲散霧消し、
みんなのもとへ届くことはなかった。
俺の歌が伝えることのできたのはただ一つ、
我が故郷よ、お前に対する愛だけだ！
年々歳々無情になりつつも、俺の心が
お前に対する愛を守り通したことに免じて、
みんなと同じ血の一滴に免じて、
俺の罪を、おお故郷よ！ 許してくれ！…

⑤ ブローク (Александр Александрович Блок. 1880-1921)

О, я хочу безумно жить:
Всё сущее – увекочечить,
Безличное – вочеловечить,
Несбывшееся – воплотить!

嗚呼、私は狂気を生きたい。
すべての存在——を不滅化したい、
名無しの人——に固有名を与えたい、
未然のもの——に形を与えたい!

Пусть душит жизни сон тяжёлый,
Пусть задыхаюсь в этом сне, –
Быть может, юноша весёлый
В грядущем скажет обо мне:

たとえ生の苛酷な夢に首を絞められようと
たとえ私とその夢に窒息しかかろうと——
陽気な若者ならきっといつか
私についてこう語ってくれるだろう、

*Простим угрюмство – разве это
Сокрытый двигатель его?
Он весь – дитя добра и света,
Он весь – свободы торжества!*
(5 февраля 1914)

この陰鬱さは大目に見よう——陰鬱さこそ
彼の奥深く秘められた原動力ではないか?
彼は全身全霊——善と光の子、
彼は全身全霊——自由の凱歌なのだ!

⑥ ザボロツキー (Николай Алексеевич Заболоцкий. 1903-1958)

НЕ ПОЗВОЛЯЙ ДУШЕ ЛЕНИТЬСЯ

心に怠惰を許してはならない

Не позволяй душе лениться!
Чтоб в ступе воду не толочь,
Душа обязана трудиться
И день и ночь, и день и ночь!

心に怠惰を許してはならない!
時間を浪費しないように
心には刻苦勉勵する義務がある、
昼も夜も、昼夜分かつずに!

Гони её от дома к дому,
Тащи с этапа на этап,
По пустыню, по бурелому,
Через сугроб, через ухаб!

心を家から家へ急き立てるがいい、
當倉から當倉へ引き摺り回すがいい、
荒地を通り、倒木を越え、
雪溜りも道の凸凹も突っ切って!

Не разрешай ей спать в постели
При свете утренней звезды,
Держи лентяю в чёрном теле
И не снимай с неё узды!

心に眠るのを許してはならない、
夜明けの星が輝くベッドの上で。
怠惰な心は邪陰に扱うがいい、
轡も手綱も外さずにおくがいい!

Коль дать ей вздумаешь поблажку,
Освобождая от работ,
Она последнюю рубашку
С тебя без жалости сорвёт.

もしか心を仕事から解き放ち、
甘やかそうなどと思おうものなら、
心はお前から最後のシャツ 1 枚まで
情容赦なく剥ぎ取ってしまうだろう。

А ты хватай её за плечи,
Учи и мучай дотемна,
Чтоб жить с тобой по-человечьи
Училась заново она.

心の肩をむんずと掴み、暗くなるまで
懇々と教え諭し、責め立てるがいい、
お前と人間らしく付き合うことを
心に改めて学び取らせるために。

Она рабыня и царица,
Она работница и дочь,
Она обязана трудиться
И день и ночь, и день и ночь!
(1958)

心は奴隷であって女王、
心は下女であって愛娘。
心には刻苦勉励する義務がある、
昼も夜も、昼夜分かたずに！

03. 引用されている作品の全貌を次に紹介しておこう。

① プウシキン

ЗИМНИЙ ВЕЧЕР

冬の夜

Буря мглою небо кроет,
Вихри снежные крутя;
То, как зверь, она завоет,
То заплачет, как дитя,
То по кровле обветшавшей
Вдруг соломой зашумит,
То, как путник запоздалый,
К нам в окошко застучит.

嵐が濃霧で空を覆い隠し、
雪を竜巻のように巻き上げ、
獣のように吼えるかと思えば、
幼子のような泣き声を立て、
古びた家の屋根を吹き荒び、
藁をざわめかせるかと思えば、
遅れてきた旅人のように
我が家の窓をノックする。

Наша ветная лачужка
И печальна и тёмна.
Что же ты, моя старушка,
Приумолкла у окна?
Или бури завываньем
Ты, мой друг, утомлена,
Или дремлешь под жужжаньем
Своего веретена?

我があばら家は
悲しくも鬱々としている。
どうしたの、婆や、どうして
窓辺で黙りこくっているの？
嵐の咆哮に、婆や、
疲れ切ってしまったのかい？
それとも自ら回す紡錘の音に合わせて
うつらうつらと舟を漕いでいるのかい？

Выпьем, добрая подружка
Бедной юности моей,
Выпьем с горя; где же кружка?
Сердцу будет веселей.
Спой мне песню, как синица
Тихо за морем жила;
Спой мне песню, как девица
За водой поутру шла.

さあ飲もうじゃないか、婆や、
我が惨めな青春の善良なる友よ、
憂さ晴らしに飲もうよ。ジョッキはどこ？
飲めば心ももっと晴れるだろう。
そして歌っておくれ、四十雀が
海の彼方で静かに暮らしていたとかいう歌を。
歌ってよ、乙女が朝早く
水汲みにいったとかという歌を。

Буря мглою небо кроет,
 Вихри снежные крутя;
 То, как зверь, она завоет,
 То заплачет, как дитя.
 Выпьем, добрая подружка
 Бедной юности моей,
 Выпьем с горя: где же кружка?
 Сердцу будет веселей.
 (1825)

風が濃霧で空を覆い隠し、
 雪を竜巻のように巻き上げ、
 獣のように吼えるかと思えば、
 幼子のような泣き声を立てている。
 さあ飲もうじゃないか、婆や、
 我が惨めな青春の善良なる友よ、
 憂さ晴らしに飲もうよ。ジョッキはどこ？
 飲めば心ももっと晴れるだろう。

② レールモントフ

Выхожу один я на дорогу;
 Сквозь туман кремнистый путь блестит;
 Ночь тиха. Пустыня внемлет богу,
 И звезда с звездою говорит.

私は一人、旅に出る。
 霧越しに砂利道が煌き、
 夜は静かに、曠野は神の声に耳をそばだてている。
 そして星々は互いに語り合っている。

В небесах торжественно и чудно!
 Спит земля в сиянье голубом...
 Что же мне так больно и так трудно?
 Жду ль чего? жалею ли о чём?

空は厳かにしてこのうえなく美しい！
 大地は青い輝きに抱かれて眠っている…
 でも私はどうしてこんなにも胸塞ぎ、息苦しいのか？
 何を待つというのか？ 何を悔やむというのか？

Уж не жду от жизни ничего я,
 И не жаль мне прошлого ничуть;
 Я ищу свободы и покоя!
 Я б хотел забыться и заснуть!

人生から期待するものなど、私にはもはや何もない。
 これまでの人生も、何一つ惜しむことなどない。
 私が求めているのは自由と平安！
 できるものなら我を忘れ、眠りの床につこう！

Но не тем холодным сном могилы...
 Я б желал навеки так заснуть,
 Чтоб в груди дремали жизни силы,
 Чтоб, дыша, вздымалась тих грудь;

けれどそれは墓地の冷たい眠りなのではない…
 私が永久に身を横たえたいと願う眠り——そこでは
 胸一杯に命の力がまどろみ、
 胸は呼吸とともに静かに波打ち、

Чтоб всю ночь, ведь день мой слух лелея
 Про любовь мне сладкий голос пел,
 Надо мной чтоб, вечно зеленея,
 Тёмный дуб склонялся и шумел.
 (1841)

甘い声が愛の歌を口ずさみながら、
 私の耳を昼夜分かつず慈しみ、
 黒々とした樅がいついつまでも青々と
 私を見おろしながらざわめいている。

③ チュツチェフ

ВЕСЕННЯЯ ГРОЗА

Люблю грозу в начале мая,
Когда весенний, первый гром,
Как бы резвяся и играя,
Грохочет в небе голубом.

Гремят раскаты молодые,
Вот дождик брызнул, пыль летит,
Повисли перлы дождевые,
И солнце нити золотит.

С горы бежит поток проворный,
В лесу не молкнет птичий гам,
И гам лесной, и шум нагорный –
Всё вторит весело громам.

Ты скажешь: ветренная Геба,
Кормя Зевесова орла,
Громокипящий кубок с неба,
Смаясь, на землю пролила.
(≒ 1828; начало 1850-х годов)

春の雷雨

五月初めの雷雨が好きだ、
春一番の雷が、
まるでしやぎ戯れるかのように
青い空に磊きわたる五月初めの雷雨が。

若々しい雷鳴が磊きわたり、
小雨がばらつき、埃が舞い上がり、
雨が蜘蛛の糸に真珠のように連なり、
太陽が蜘蛛の糸を金色に染め上げている。

山から駿足の流れが駆け下り、
森には鳥の鳴き声が引きも切らず、
森は囁き、山はざわめき——
すべてが楽しげに雷鳴に和している。

君は言うだろう、軽はずみなヘーペー*が
ゼウスの鷲に餌をやるときに
酒盃に泡立つ酒を空から
笑いながら地上に霽ってしまったのだと。
(*ヘーペーは青春の女神)

④ ネクラソフ

ПОХОРОНЫ

Меж высоких хлебов затерялся
Небогатое наше село.
Горе горькое по свету шлялся
И на нас невзначай набрело.

Ой, беда приключилась страшная!
Мы такой не знавали век:
Как у нас – голова бесшабашная –
Застрелился чужой человек!

Суд приехал... допросы... – тошнехонько!
Догадались деньжонок собрать:
Осмотрел его лекарь скорехонько

埋葬

背高の穀物林の中に埋もれてしまっている、
我らが貧しき村は。
不幸中の不幸が世間をさ迷い歩き、
何の因果か我らが村へやってきた。

嗚呼、何たる災難が起こったことか!
こんなにひどいのは生まれて初めてだ。
我らが村で、無鉄砲な余所者が
自分で自分をずどんとやったのだ。

判事がきた… 取調が始まった——うんざり!
みんなで金子を出し合うことにした。
その金子で医者はずぐさま死体検分し、

И велел где-нибудь закопать.

どこかに墓穴を掘るようにと言った。

И пришлось нам нежданно-негаданно
Хоронить молодого стрелка,
Без церковного пенья, без ладана,
Без всего, чем могила крепка...

まさかたまさか俺たちが
若い獵師を埋葬する羽目に陥った。
聖歌も歌われず、香も焚かれず、
墓を飾る何一つないままで...

Без попов!.. Только солнышко знойное,
Вместо ярого воску свечи,
На лицо непробудно-спокойное,
Не скупясь, наводило лучи;

神父さえいない!... 灼熱の太陽だけが
明るい蠟燭の炎に代わって
二度と目覚めない遺体の顔に
その光を惜しげもなく注ぎ込んでいた。

Да высокая рожь колыхалася,
Да пестрели в долине цветы;
Птичка божья на гроб опускалася
И, чирикнув, летела в кусты.

それでも背高のライ麦は身体をくねらせ、
谷間には花が咲き乱れていた。
神の小鳥は棺の上に舞い降り、
一鳴きすると、木立ちへと飛び去った。

Поглядим: что ребят набирается!
Покрестились и подняли вой...
Мать о сыне рекой разливаётся,
Плачет муж по жене молодой, —

辺りを見回せば、そろそろと集まりくる子供たち!
十字を切り、しくしくと泣きそぼる子供たち...
亡くした息子を偲んで涙の川に暮れる母親、
亡くした若妻を偲んで泣いている夫——

Как не плакать им? Диво велико ли?
Своему-то свои хороши!
А по ком ребятишки захныкали,
Тот наверно был доброй души!

彼らの誰が泣かずにおれようか? 何の不思議があるか?
身内は身内にとって愛しいもの!
子供たちが偲んですすり泣いた人も、
きっといい人だったに違いない!

Меж двумя хлебородными нивами,
Где прошёл неширокий долок,
Под большими плакучими ивами
Упокоился бедный стрелок.

二筋の夷り豊かな畑の狭間、
狭い谷間の走っていた場所の
大きな枝垂れ柳の並木のたもとに
哀れな獵師は安置されている。

Что тебя доканало, сердешного?
Ты за что свою душу сгубил?
Ты захожий, ты роду нездешнего,
Но ты нашу сторонку любил:

哀れな男よ、いったい何がお前を追い詰めたのか?
どうして自分の命を絶ってしまったのか?
お前は行きずりの余所者、なのに
我が村が好きだった。

Только минут морозы упорные
И весенних гостей налетит, —
«Чу! — кричат наши детки проворные: —
Прошлогодний охотник палит!»

厳しい寒さが過ぎさえすれば、
春の客たる鳥たちが群れ飛びくるものを——
「ほら——と俊敏な村の子供たちが叫ぶ——
去年の獵師が鉄砲を撃ってるぜ!」。

Ты ласкал их, гостинцу им нашивал,

お前は子供たちを可愛がり、土産を配っていた。

Ты на спрос отвечать не скучал.
У тебя порошку я попрашивал,
И всегда ты нескупо давал.

お前は訊かれたことには何でも答えてやっていた。
俺がお前に火薬をせがんだときも
お前はいつも気前よくくれたものだった。

Почивай же, дружок! Память вечная!
Не жива ль твоя бедная мать?
Или, может, зазнаба сердечная
Будет таять, дружка поджидать?

安らかに眠るがいい、友よ！ いつまでも忘れはしない！
お前の哀れな母親は生きてはいないのかい？
あるいはもしや、この先ずつと愛しい恋人が、
身を細らせながら、お前を待ちはしないだろうか？

Мы пойдём, повестим твою милую:
Может быть, и придет любя,
И поплачет она над могилою,
И расскажем мы ей про тебя.

俺たちが行ってお前の恋人に告知らせよう。
たぶん彼女は愛しさに駆られてやってきて、
墓に涙を落とすに違いない。
そしたら俺たちがお前のことを話して聞かせよう。

Почивай себе с миром, с любовью!
Почивай! Бог тебе судия,
Что обрызгал ты грешною кровию
Неповинные наши поля!

平和と愛を胸に、安らかに眠れ！
安らかに眠れ！ 神がお前の裁き手だ、
何しろお前はその罪深き血を
我が清らかな野に振り撒いたのだから。

Кто дознает, какую кручиную
Надрывалось сердце твоё
Перед вольной твоею кончиною,
Перед тем, как спустил ты ружьё?..

誰知ろう、お前の心が、
自分で決めた死を前にして、
引金を引くのの前にして、
どんな悲しみに引き裂かれていたかなど…

Меж двумя хлебобродными нивами,
Где прошёл неширокий долок,
Под большими плакучими нивами
Упокоился бедный стрелок.

二筋の実り豊かな畑の狭間、
狭い谷間の走っていた場所の
大きな枝垂れ柳の並木のもとに
哀れな猟師は安置されている。

Будут песни к нему хороводные
Из села по заре долетать,
Будут нивы ему хлебобродные
Безгреховные сны навевать...
(1861)

夕暮れ時ともなれば村からは
輪舞の歌声が彼のもとへ届くだろう。
実り豊かな畑は彼に
実り豊かで無邪気な夢を運んでくるだろう…

⑤ フェート (Афанасий Афанасьевич Фет. 1820-1892)

Я пришёл к тебе с приветом
Рассказать, что солнце встало,
Что оно горячим светом
По листьям запрепетало;

僕がきたのは君に挨拶するため、
太陽が起き上がり、
その熱い光で木の葉を
震わせ出したと告げるため。

Рассказать, что лес проснулся,
Весь проснулся, веткой каждой,
Каждой птицей встрепенулся
И весенней полон жаждой;

森が目を覚まし、森全体が
すっかり目を覚まし、枝の一本一本に、
小鳥一羽一羽に元気づき、春の息吹に
満ち溢れていると告げるため。

Рассказать, что с той же страстью,
Как вчера, пришёл я снова,
Что душа всё так же счастью
И тебе служить готова;

僕は今日もまた昨日と同じ
情熱に駆られてやってきたこと、
僕の心はいつでも喜んで君に
仕えたがっていることを告げるため。

Рассказать, что отовсюду
На меня весельем веет,
Что не знаю сам, что буду
Петь, – но только песня зреет.
(1843)

僕は全身、前後左右上下から
陽気の風を浴びていること、自分でも
歌うべき歌は知らないけれど、ただ自然に
歌が生れ熟してしまうことを告げるため。

⑥ エセーニン (Сергей Александрович Есенин. 1895-1925)

ПИСЬМО МАТЕРИ

母親への手紙

Ты жива еще, моя старушка?
Жив и я. Привет тебе, привет!
Пусть струится над твоей избушкой
То вечерний несказанный свет.

まだ達者かい、俺の婆ちゃん?
達者だよ、俺もね。元気でいておくれ、元気で!
あんたの住むボロ屋の上には、あの
えも言われぬ夕べの光が照り返っていますように。

Пишут мне, что ты, тая тревогу,
Загрустила шибко обо мне,
Что ты часто ходишь на дорогу
В старомодном ветхом шушуне.

みんなの手紙によれば、あんたは心配を押し隠し、
俺のことで散々悲しんでるって言うじゃないか、
流行遅れの古い外套を羽織って
しょっちゅう道端に出てるって言うじゃないか。

И тебе в вечернем синем мраке
Часто видится одно и то ж:
Будто кто-то мне в кабацкой драке
Саданул под сердце финский нож.

青褪めた夕闇の中、あんたはしょっちゅう
同じ一つことを思い浮かべているんだらうね。
酒場の喧嘩で誰かが俺の心臓の下を
ナイフでぐさりと刺したみたいなのをね。

Ничего, родная! Успокойся!
Это только тягостная бредь.
Не такой уж горький я пропойка,
Чтоб, тебя не видя, умереть.

Я по-прежнему такой же нежный
И мечтаю только лишь о том,
Чтоб скорее от тоски мятежной
Воротиться в низенький наш дом.

Я вернусь, когда раскинет ветви
По-весеннему наш белый сад.
Только ты меня уж на рассвете
Не буди, как восемь лет назад.

Не буди того, что отмечалось,
Не волнуй того, что не сбылось, –
Слишком раннюю утрату и усталость
Испытать мне в жизни привелось.

И молиться не учи меня. Не надо!
К старому возврата больше нет.
Ты одна мне помощь и отрада,
Ты одна мне несказанный свет.

Так забудь же про свою тревогу,
Не грусти так шибко обо мне.
Не ходи так часто на дорогу
В старомодном ветхом пуштуне.
(1924)

何でもないよ、おっかさん！ 心配するなって！
それは思い過ぎの戯言さ。
俺はもうそんなのひどい飲兵衛じゃないよ、
あんたの顔も見ずに死ぬほどの飲兵衛じゃね。

俺は昔ながらに優しいままで、
夢に見るのはただ一つこと、
早いとこ小うるさい塞ぎの虫におさらばし、
ぺちゃんこの我が家へと帰ること。

きっと帰るさ、我が家の白い庭に
木が春らしく枝を張り出す頃に。
ただね、おっかさん、8年前のように
夜明けとともに起こすのだけは止めてくれ。

終わった夢のことは思い出させないでくれ、
できなかったことを突つかないでくれ。
俺は人生であまりに早過ぎる喪失と疲労を
味わわなきゃならない宿命だったのさ。

それにお祈りを教えないでくれ。必要ないから！
昔に帰るなんて、もはやできない相談。
あんただけが俺の支え、俺の喜び、
俺にはあんただけがあのおえも言われぬ光なのさ。

だから心配事なんて忘れてくれ、
俺のことで散々悲しむのは止めてくれ、
流行遅れの古い外套を羽織って
そんなにしよっちゅう道端へ出てゆかないでくれ。

04. 引用されている作品の全貌を次に紹介しておこう。

① プウシキン

Для берегов отчизны дальной
Ты покидала край чужой;
В час незабвенный, в час печальный
Я долго плакал пред тобой.
Мои хладеющие руки
Тебя старались удержать;
Томленья страшное разлуки
Мой стон молил не прерывать.

遥かなる祖国の岸辺を求めて
君は他国の地を立ち去ろうとしていた。
忘れ難いそのとき、悲嘆のそのとき
僕は君を前に長い間泣いていた。
僕の冷たくなってゆく両の手は
どうにか君を引きとめようとした。
別離のひどい苦悩も終わりのないことを
僕の呻きは切に願っていた。

Но ты от горького лобзанья
Свои уста оторвала;
Из края мрачного изгнанья
Ты в край иной меня звала.
Ты говорила: «В день свиденья
Под небом вечно голубым,
В тени олив, любви лобзанья
Мы вновь, мой друг, соединим».

Но там, увы, где неба своды
Сияют в блеске голубом,
Где тень олив легла на воды.
Заснула ты последним сном.
Твоя краса, твои страданья
Исчезли в урне гробовой –
А с ними поцелуй свиданья...
Но жду его; он за тобой...
(1830)

② チュッチェフ

К. Б. (Баронесса Крюденер?)

Я встретил вас – и всё былое
В отжившем сердце ожило;
Я вспомнил время золотое –
И сердцу стало так тепло...

Как поздней осени порою
Бывают дни, бывает час,
Когда повет вдруг весною
И что-то встрепенется в нас, –

Так, весь обвеян дуновеньем
Тех лет душевной полноты,
С давно забытым упоеньем
Смотрю на милые черты...

Как после вековой разлуки,
Гляжу на вас, как бы во сне, –
И вот – слышнее стали звуки,
Не умолкавшие во мне...

しかし君は苦々しい口付けから
その唇を引き離したのだった。
暗い流刑の地から別天地へと
君は僕を呼び招いていた。
君は言った、「また会う日には
どこまでも青い空のもと、
オリーブの木陰で、友よ、私たちはまた
愛の口付けを交わしましょう」と。

しかし、嗚呼、頭上に大空が
青々とした光を放つ彼の地、
オリーブの木陰が水面に映える彼の地で、
君は永遠の眠りについてしまった。
君の美しさ、君の苦しみは
骨壺の中へと消え去ってしまった——
それらと一緒に再会の口付けもまた…
それでも僕は待っている、君の口付けを…

К. В.(男爵夫人クリュデネル?)

あなたに出会った——すると過去のすべてが
冷え切った心の中に甦ってきた。
あの素晴らしい時代が思い出され——
心がぼかぼかと暖かくなった…

晩秋にときとして、
春の気配が忽然と漂い、
身中に何かか奮い立つような
そんな日々、そんな一時があるように——

あの頃の充実した気力のそよぎに
全身を委ねながら、
とうに忘れ果てていた喜びを噛みしめ、
あなたの美しい顔立ちを見つめる…

気の遠くなるほど長い別離の後に
夢でも見るようにあなたを見つめると——
心の中で止むことのなかったあの、
あの音の響きが次第に高まっていった。

Тут не одно воспоминанье,
Тут жизнь заговорила вновь, —
И то же в вас очарованье,
И та ж в душе моей любовь!
(26 июля 1870)

これはたんなる思い出などではない、
これは生命が今また芽吹き始めた証なのだ——
あなたからは昔と同じ魅力が放たれ、
私の心には昔と同じ愛が息づいている！…

③ フェート

Я тебе ничего не скажу,
И тебя не встревожу ничуть,
И о том, что я молча твержу,
Не решусь ни за что намекнуть.

君には何も言うまい。
君を僅かなりとも心配させまい。
無言のうちに繰り返す思いも
何があろうと決して気取られまい。

Целый день спят ночные цветы,
Но лишь солнце за рошу зайдёт,
Раскрываются тихо листы
И я слышу, как сердце цветёт.

夜の花は終日眠っていても、
太陽が木立に姿を隠すや否や
その葉を静かに開き、僕は
心に活気の漲るのを耳にする。

И в больную, усталую грудь
Веет влагой ночной... я дрожу,
Я тебя не встревожу ничуть,
Я тебе ничего не скажу.
(2 сентября 1885)

病んで疲れ果てた胸に
夜の湿気が吹き寄せ… 僕は身震いする。
君を僅かなりとも心配させまい、
君には何も言うまい。

05. 『戦争と平和』第2部4編7章からの引用。ロストフ家が狩りに出かけたとき、連れ立った「おじさん」(ロストフ家の遠い親戚)の歌う様子を語り手が解説した箇所である。

06. 札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」, Vol.30, No.1; Vol.30, No.2; Vol.32, No.1; Vol.32, No.2を参照のこと。